

忘れたり、是則心齋橋の餅屋歟、此畫我衣に縁先に木馬を出したりとあるに合す、馬に面をかぶらせたるは、馬の息の餅にかかるがゆゑ、ふく面を掛しといふ洒落ならんと、或人はいへり、我衣に、元祿の頃やみたりとあるは誤にて、寶暦年間まで、駒込追分の餅屋には此木馬の看板ありしとぞ。

是も又古老の話に、木馬は眞粉馬の看板なり、昔は眞粉馬、飴の鳥、一對の物なりしが、今飴の鳥はありて、眞粉馬は絶たりと、此說により再案るに○中略

後大矢數延寶八年吟

吾妻の方へ鞍置の馬

逢坂のしんこの形跡もなし

などあり、此ほかの俳書にも見えたれど、うるさければ略つ、西鶴の句に、古老の話を合せ考れば、しんこ馬の看板なりといふ説も捨がたし。

〔東都歲事記〕四月廿六日、此節より餅搗街に賑し、其體尊卑に由りて差別あれども、おほよそ市井の餅つきは、餅搗者四五人宛組合て、籠蒸籠白杵薪、何くれの物擔ひありき、舗下餅つかする人、糯米を出して渡せば、やがて其家の前にてむし立、街中せましと搗たつることいましましく、晝夜のわからなし俗是を賃餅又は引すりなどいふなり。

〔大江俊矩記〕文化六年十二月廿五日辛亥、家内餅春也、當年は今朝出勤故午後ニ爲致未刻頃よりむしニ來、戌刻相濟、都合五斗八升也、家禮如例、ちん春中町安兵衛也、文化十三年十二月廿五日己亥、餅春也、當年初而家内ニ而手春爲致、清介壹人雇、祝儀銀三匁、壹封、清八手傳に來、餅ニ品添而遣、鏡餅也、家禮等如併。

〔北小路金銀米錢諸出入覺帳〕文化六年
廿四日〇十二月
五拾文

あづき五合